人間・社会・情報

本学助教授　高橋憲昭

現代社会をとらえる言葉として、高度産業社会、独占資本主義社会、産業福祉国家、大衆社会など、さまざまな用語がつかわれる。しかし、近頃それらとともに、『情報社会』という用語がつかわれるようになった。いまではむしろこの方がより一般化しているようにもみうけられる。さらに、最近の情報伝達の手段や情報蒐集・処理機構の急速な発達が、〝情報社会〟というこの用語に、ますます重い意味内容を加えようとしている。もはやわれわれは、〝情報〟を無視しては現代の社会を語れないところまできているといえよう。

そこでつぎに、この情報を、人間と社会とにかかわる立場からみなおしてみることにする。[1]

ところで、この〝情報社会〟や〝情報化時代〟などの言葉には、大別して二つの対極的なイメージが含まれているといわれる。一つは楽観論的なものであり、他は悲観論的なものである。前者は、情報の蒐集・処理・伝達などの機関、とくに処理機械としてのコンピューターの発達によって、人間はいままでそれらの面に注いでいた定型的労働から解放されて、そのエネルギーを創造的思考や行動、さらには余暇に当てることができるという考えの上にたっている。後者には、さらに三つのみかたがなりたつ。つまり、情報を直接とり扱うのはテクノクラットであるため、人びとは情報を媒介として、それらテクノクラットの権力に操られるとするもの。また、すべての事象を情報として処理することは事象を計量化することである、したがって、それがすすめばトータルな人間性がその中に分解されてしまうというもの。さらには、「野性の知性の復活」を望むような、情報社会へ対する根源的な疑問をもつ立場である。そして、これらはいうまでもなく、情報が人間に与えるマイナスの影響に眼を注いでいる。けだし、このような、楽観論と悲観論の相反する二つの考えかたがなりたつのも、それは結局、情報ないし情報社会の複合性を示すものであり、また、それぞれのもつ異なった側面を強調することによって生じたものにほかならない。

ここで〝情報〟(information) とは何か、ということが問題となろう。〝情報〟についての概念は多義的であって、結論的に定義づけることはむつかしいが、いま、つぎのような一つのみかたがある。つまり、それは「他人によって伝達されるか、あるいは自己自身の研究と調査によって獲得された news, advise, knowledge である」(Webster's International Dictionary, merriam Co. 1899. U.S.A.) とする考えかたである。[2] これは、いうまでもなく情報を広い意味での知識とみている。一方、経済学の面からは、情報とは投資財的知識であるとする。すなわち、知識にはいわゆる生産に役立たないその場かぎりのものと、耐用年数があり、なんらかの物的、心的生産に役立つものとがあるが、情報というばあいは、後者の投資財的知識をさし、知識とは

その点からみた情報の部分集合であるとするのである。（今井賢一）。

しかし、ともかくここでは、一応、情報を知識としてとらえることにしよう。が、そうだとしても、知識と情報はそのまま全く同じものとしてイコールで結びつけられるものではない。そこには明らかに差異がある。そして、その差異性のなかでも、最も注目すべきもの、つまり、「知識」に「情報」としての社会学的な意味を付与するものは、それが、「他人によって伝達された知識」（傍点筆者）であるという点である。そこに、社会学からみた「情報」の一つの意味内容がある。

およそ人間は、環境へ対する適応の過程のなかで生きる動物である。人間は、主体と環境との相互作用のなかでさまざまな文化をつくりあげてきた。人間をとりまく環境は、自然的環境、社会的環境にわけることができる。人は、その環境のなかに、それとのかかわり合いにおいて生きるのである。そして、それぞれの環境への適応の過程が、人間の行為の形をとってあらわれてくる。人は各自の動機志向（motivational orientation）と価値志向（value orientation）にしたがってこれらの環境へ対して、おのおのの行為を通して働きかけ、また、人間相互の行為の交換を行なってきたのである。ところで、いま、この環境という言葉を空間という言葉におきかえてみると、つぎのようにいうことができる。すなわち、人は自然的空間、社会的空間と同時に行為空間をもち、それらの交錯のなかにその生活を成りたたせてきたのであると。いま、ここでいう自然的空間とは、生活のミニマムなユニットとしての家族を含むコミュニティーの自然的地域空間を意味し、社会的空間とは、家族メンバーとしての個人に何らかの関連をもつ文化や人のひろがりを意味している。そして、行為空間とは、家族メンバーとしての個人が、行為し、あるいは行為の交換を行うひろがりを意味するのである。

このように考えると、前近代社会では、自然的空間、社会的空間、行為空間の三者は、そのひろがりが比較的狭小で、しかもそれぞれはほぼ同心円的に重なっていたといえる。未分化で閉鎖的な未開社会や封建社会は、まさにそのような社会であった。しかも、そこにおける人びとの経験は、いわゆる具体的、直接的なものであり、ホイジンガーの「中世の秋」（Herfstij der Middeleeuwen, 1919, Johan Huizinga）にみられるように鮮烈とまでいえるいきいきとした直接経験の世界に人びとは住んでいた。しかし、前近代から近代への時代の移行は、この三空間の拡大と乱れとして象徴されてよいであろう。科学や工業の進歩は、三空間のひろがりを拡大し、しかも三者のひろがりは必ずしも一致しなくなった。社会学的には、これはコミュニイティーの拡大とアソシェーションの分化、およびアソシェーション相互のあるいは両者の交錯状態としてとらえることもできる。けれども、近代と区別され質的に新しい時代と考えられる現代は、すでに三空間の拡大や乱れとしてのみでは処理しきれない状況にあるとも考えられている。つまり、現代的状況の分析には、そこにもう一つの新しい概念内容を設定しなくてはならなくなっている。すなわち、情報環境と情報空間のタームが意味する概念内容の設定の必要性

が語られているのである。(大前正臣)。社会の進歩は、社会の拡大と、デュルケムのいう有機的連帯(solidarité organique)を増した。人は、もはや自己をとりまく狭い空間のなかで、それぞれの環境への直接経験的関与のレベルにのみとどまるわけにはいかなくなった。好むと好まざるにかかわらず、直接経験でとらえることのできぬより広い空間につれだされるのである。その空間は、人びとの具体的な直接経験ではとらえられぬところのもの、いわば、間接的経験によってしかとらええぬ世界である。人びとの生活は、このような間接経験の世界への関与と適応なくしては語れなくなった。社会の身近なできごととともに、直接に経験することのできぬ遠い場所でのできごとにも、われわれの生活は微妙につながり、人はそれへの適応を迫られるのである。

それでは、この直接経験ではえられぬ間接経験の素材は、どのようにして獲得されるのか。いうまでもなくそれは、主にマス・コミュニケーションを媒介とした、情報の形として与えられるのである。つまり、「他人によって伝達された知識」として与えられ、それが間接経験の世界を構成するのである。したがって、それはまた、情報によってつくられた世界ともいえるし、その素材としての情報源のひろがりを情報空間とよぶことができる。こうして、現代社会の一つの特徴は、人間がマス・メディアの力をかりて無限にその情報空間を拡大させつつあるところにあるわけである。しかも情報空間は、自然的空間や社会的空間と交錯しながら、一方、それらとは次元の異なったものとして、両者をこえて無限の空間に人間を導くのである。

こんご、この情報空間はますます拡大され、情報量はますます多量になるだろう。だからこそ、現代社会をとらえるには、この情報空間の概念設定が必須なものとなるわけであり、他方では、このような情報空間の中に生きる人間にとって考えねばならぬいくつかの問題が生まれてくる。つぎにそれらの一、二の問題をとりあげてみよう。

まず第一の問題は、ブーアスチン(The Image, 1962, D. J. Boorstin)の言葉をかりれば、情報は疑似イベント(Pseudo-events)であるということである。これには二つの意味があると考えられる。(1)は、遠い情報空間から間接経験としてもたらされる情報は、直接経験で確証することができないという意味で疑似である。(2)は、それらの情報はつくられるという意味で疑似である。すなわち、情報は、マス・メディアを通してマス・コミュニケーションの形として与えられる。とすると、そこにマス・メディアの側の価値観や意図的態度が一つのフィルターとして作用することになる。だから、受け手に流される情報は、メディアの側のフィルターによって歪みを与えられていることになる。リップマン(Public opinion, 1922, W. Lippman)は、このように情報によって再構成された世界像を疑似環境(準環境)(Pseudo-environment)とよんだ。それは、多分にイメージにおける世界であるといえる。そこでは、人は直接経験で確認しえた事実世界へ対して反応するのではなく、つくられた疑似イベントの世界へ

対して反応し適応しなければならない。ここに、現代における一つの重要な混乱、つまり、虚と実の不明瞭性があり、事実の世界とイメージの世界の混乱がある。こうして、実像へではなく、虚像への人間の反応が、日常の人間生活のみならず、社会に及ぼすマイナスの影響は、いまさらアノミー理論による分析をまつまでもないであろう。

つぎに考慮すべき第二の問題は、情報空間のドーナツ化現象（大前正臣）によって、地域社会の結合力が弱まるということである。つまり、社会の発展にともなう情報空間の拡大によって、今まで個人へ対する重要な情報供給源であった地域社会空間をこえた外なる情報空間から、質・量ともにすぐれた情報が人びとにもたらされるようになった。そして一方では、それと反比例して、身近かな地域社会の情報は真空状態となった。人は、もはや、生活を持続するために必ずしも身近な地域社会の情報を必要としなくなったのである。こうして、人びとは、しだいに、地域社会へ対する依存性と連帯の意識を失ない、情報によって与えられた疑似イベントの世界、イメージのなかの世界へ連帯感をいだくようになる。[3]

人は本来、身近かな土地に結びついた生活空間を求める。テリトリーへの強い欲求をもつ。そのなかでの生活の安定に資するために直接経験による情報を求めた。これが人間の情報に対する基本的なありかたであった。しかし、社会の進展は、人びとをこのレベルにのみとどまらず、より質が高くより豊富な情報を求める方面に向かわせる。その志向は、シンボルによる、さらにはマス・メディアによる情報空間の拡大となってあらわれたが、潜在的結果として、地域社会の生活空間へ対する依存と関心を失なわせることになったのである。これは、現代の一つの皮肉な自己矛盾といわねばならない。

このように、社会の情報化は、一方において楽観論に代表されるようなプラスの顕在機能をしめすとともに、他方では、かずかずのマイナスの潜在機能をあらわしている。ここでは、主に社会学からみた情報のもつ一つのマイナスの潜在機能面を素描的にとりあげてみた。が、ともかく、こうした状況の中に生活する現代人は、リースマン（The Lonely Crowd, 1950, D. Riesman）のいうように、常にレーダー電波を周囲にだしながら、環境に対して適応していかねばならない運命にある。社会構造が複雑化し変動の激しい社会においては、あらゆる情報をすばやく正確に、しかも豊富にキャッチし、適切に環境に適応していく必要があるからである。他人志向型（other-directed type）の人間は、まず情報へ対して過剰すぎるほどの志向をもつものである。そしてまた、そこにこそ今までのべてきた情報の潜在的逆機能が強く作用し、いわゆる情報による人間疎外の大きい可能性があるわけである。

それでは、われわれは、多くの問題性をはらむそれらのことがらにどう対処すべきであろうか。結論からいえば、それに対しうる特効薬はない。しかし、いま受け手の側について、しかも非常に一般的にいえば、まず情報のザインとしての実態を認識すること、さらに、情報に対する選択的態度をもつことが大切である。

そして、後者は前者からひきだされるとみてよいであろう。これは、消極的ではあるが一つの着実なみちである。ブーアスチンの言葉をかりていえば、われわれは、正しい方向へ歩きだすことができる前に、まず目覚めなくてはならない。われわれは、これまで夢遊病者であったことを自覚することができる前に、まずわれわれの幻影を発見しなくてはならない。われわれが望むことのできる最も小さなこと、そして最も望むことが可能なことは、われわれのひとりひとりが、その中で毎日の生活を送っているイメージの未知のジャングルを見抜くことである。どこで夢が終り、どこで幻影が始まるかを新しく発見することである。それで十分なのである。そうすれば、われわれはわれわれの位置を正しく知り、ひとりひとりが行きたいと思う目的地を自分で決めることができる、のである。④（1970. 1.）

註

① 「情報理論」というばあい、主に情報を処理するためのコンピューターを中心とする操作プロセスのメカニズム分析にその中心がおかれているばあいが多い。（International Encyclopedia of the Social Sciences, D. L. Sills,Editor, Volume 7. The Macmillam Co. & The Free Press, 1968 information storage and retrieval の項を参照せよ。）けれども、社会学の見地からは、その意味における情報理論は直接の生産性をもたない。社会学にとって重要なのは、情報処理の操作プロセスそのものではなく、むしろ、情報が人間の社会行為や関係にどのようなかかわりかたをするか、ということである。いいかえれば、人の、外的環境への選択的適応行為のための環境認識のプロセスに、情報がどのようにどの程度にかかわるか、そしてそれが、人間関係や社会集団のありかたにどのような影響を及ぼすか、ということである。

② 註①の立場からみるならば、(2)に示された情報の意味は示唆に富んでいる。ちなみに原文はつぎの通りである。

information.

(1) The act of informating, or communicating knowledge or intelligence. (2) News, advise, or knowledge, communicated by others or obtained by personal study and investigation: intelligence; knowledge derived from reading, observation or instruction. (3) (law) 略

③ このことについて、大前正臣氏はつぎのようにのべている。すなわち、「われわれは、ここで重大な岐れ道にさしかかったと思われる。生存のための情報空間の拡張をさらに急ピッチで続けることを要求される一方、同じく生存するために、〝テリトリー化〟の回復が要求されている。」とし、地域社会に、生活と情報の合致した空間をつくりだすことの必要性をとく。そのためには、「どこに住もうと、日帰り行動情報空間に似た空間を身の回りに復活させてみることであり、地域社会有線化は、その目的にいくらかでも貢献するだろう。」というのである。つまり、氏は、地域社会独自の有線テレビを設置し、地域社会の日常生活の身近かな情報を、きめこまかく放送することによって、情報の直接性と日常性を、さらには、それらを通して、地域社会への連帯性が回復されようというのである。（中公・昭和四四年・十一月号）

また、これとは発想の基礎が異なるが、山崎正和氏は、「日常性の情報」回復の重要性を指摘している。氏によれ

ば、現代の人間は、マス・コミュニケーションによる情報公害にさらされている。つまり、情報の素材は、「日常」に対する「異常」である。「異常」であるからこそニュースになる。しかもその「異常」がマス・コミュニケーション情報のレベルにのぼると、何百万倍にも増巾される。その「日常」との極度のアンバランスが問題である。したがって、そのバランの回復の意味からも、「日常性の情報」が重要な意味をもつ、というのである。少しながいが、氏の言葉の一部を引用しよう。「例の大学紛争がたけなわであったころ、ある大学の教師が特殊なラジオを買って、それで報道陣のトランシーバー通信を傍受していた。長い激闘が続いた日の夜、彼は、ひとりの若い記者が同僚に家庭への伝言を頼んでいるのを聞いた。取材やもめになっている妻に、こまごました家庭の雑事が伝えられるのを聞いて、その大学教師はわけもなく心がなごむのを覚えたという。ひとりの人間が生きているということの実感を、彼は、日常性が残らず失われている時間のなかで思い出したのである。

こういう時代には、私たちは、この種の実感を努力して思い出さなければならない。新聞やテレビのニュースを遠ざけることはできないのだから、私たちはそれにバランスをとる別種類の情報を捜すほかはない。なんでもない日常の些事が、それなりの表情を持って、今日も明日も変わらずにあることを、手探りで確かめなければならない……」。（京都新聞、昭和四五年一月八日号『現代のことば』）。傍点筆者。

④ ごく最近、「情報行動論」・（北村日出夫・誠文堂新光社・昭和四五年二月発行）という小冊子が出版された。ここでは情報行動という新しい概念の設定が試みられているが、その基本的な枠組は、本稿の論理のそれと矛盾しない。